



コルドバ歳時記への旅 ③ 太田尚樹

5月

蜜蜂の群れを追う人々

五月は、新緑が目眩しい光の輪の中を行く人々の顔に喜びが溢れ、道行く彼らの動きがもつとも速くなる。市場の店員たちの掛け声が一段と高くなるのもこの季節である。

だが誰よりも春の到来を心待ちにしているのは、スペイン北部ピレネーの麓で、花の移ろいを追って移動する養蜂家たちだ。春の訪れの遅いこの地方では、五月後半になると、ようやくマルガリータが咲き始め、アマポーラ、タンポポがすぐ後に続く。種類が多く、花の季節も長いので、ピレネーの山懐に入っていくのは、初夏になってからである。

それはピレネーを越えた南仏でも同じで、養蜂家た

ちは巣箱を仕掛けてのんびりと春が行くのを待つ。彼らは初夏の頃にはローヌからさらにブルゴーニュへと北上し、盛夏の頃にはアルプスの麓からさらに中腹まで登って行く。雪の消えた斜面は、キンポウゲやアルペン・ローゼ、エーデルワイスが咲き誇るお花畑である。スイスで登山に熱中していた若い頃、私は休養日になると下山して、雪解けの後を追って草原を登ってくる養蜂家や牛の群れを眺めるのが好きだった。彼らの季節を棲み分けて移動する様は、研究フィールドにしていた比較文明論の世界に、ヒントにもなっていたのである。

だがこの季節、スペイン中部のカステイリャや、

南のアンダルシアでは、春は瞬間に行ってしまう。五月の『コルドバ歳時記』（西暦九六一年編纂）でも、十五日の項に「スライヤー（日本では「昂^{すばら}」が昇り、植物は枯れ始める」とあるように、五月の後半は激しく燃えだした太陽の下で、あれほど咲き誇っていた花々もドライ・フラワーになってしまふ。

そこでこの地方の養蜂家たちは、五月の声を聞くとグラナダ山中をめざして南下を開始する。この頃、グ

ラナダのシエラネバダ山系では、麓から中腹一帯の木陰に巣箱が見られるのも、初夏の風物詩だ。そして五月末、北側斜面に回った蜜蜂たちを追うように、巣箱も北側に移動していく。地形から植物の生態系まで熟知した養蜂家たちは、独自の花暦を持っているのだ。

この頃、巣箱の中に一匹だけ君臨する女王蜂は、せっせと産卵にいそしみながらも、働き蜂の群れを指揮するの忙しい。しかし、女王蜂に群がるオスたちは、女王に卵を産ませるだけである。

ワインの里

古来、南欧の国々の生活誌に欠かせないのはワインだったが、実際ワイン文化は、日々の生活の営みに深く浸透してきた。スペイン北部のナバラ地方はリオハ(Rioja)ワインの産地として日本でも知られているが、土地の人々は、「主から与えられた葡萄が大地を潤し、ワインがわれわれの心を清める」と、胸を張る。

現在では個々の生活パターンが多様化して、以前ほどではなくなったが、スペインの家庭では、昼食は一家揃ってテーブルを囲む習慣が中世以来残っていた。



「養蜂」『エクスルテット・ロールズ』写本
南イタリア 11世紀 ヴァチカン使徒図書館蔵